＜第 一 日＞

5月21日（土）午後1時45分

研　究　発　表

第 一 室（本館2階 D201教室）

司会　元大阪市立大学教授　市川美香子（いちかわ みかこ）

Charles Brockden Brown における庇護と迫害

【招待発表講師】青山学院大学教授　折島正司（おりしま まさし）

Charles Brockden Brown の作品では、変装とそのさまざまな変奏による正体の隠蔽が繰り返される。一見したところ理由のよくわからないこの繰り返しであるが、比較的多くの場合が、代理親的で庇護者的な人物が迫害者に変貌する、あるいは逆に庇護を受ける人物が代理親的庇護者に対する攻撃者に変貌する、という型に属していると思われる。

本発表では、Brown の初めの4つの長編小説についてこのことを検証したい。また、庇護者／迫害のモチーフが、父と息子の関係に託して語ることのできるダイナミズムの産物であることを検証したい。そのために、庇護／迫害のモチーフがスパイ行為という形でとりわけ顕著であると同時に、息子の位置が空白で女性が代わってその位置にいる *Ormond* を特に丁寧に吟味したい。

司会　神戸女学院大学教授　鵜野ひろ子（うの ひろこ）

“I learned—at least—what Home could be—”
The Architecture of Home in the Works of Emily Dickinson

国際基督教大学大学院　Samantha Landau

This presentation will explore the image of home in Dickinson’s poetry, using both close readings of her poetry and historical information. The motif of the house in Emily Dickinson’s poetry does not present an ideal of home; instead, it offers a dual image of home. Her poems demonstrate that home may be seen as both a physical space (the house) and a mental space (the mind) and that these spaces present positive possibilities as well as menacing confinement. Tangible constructions in the form of architectural metaphors lend support to her inherently ambiguous and often uncanny subject matter. Behind the doors and the windows, inside the chambers and underneath the gables of the houses in her poems, there exist social values of hospitality, gentility, and distinction, the joy and comfort associated with a happy home, but also anxieties, guilt, and fears. The image of home is therefore haunted by contradictions, demonstrating a fundamental ambiguity.

司会　鹿児島大学教授　竹内勝徳

義務への熱狂者
ハーマン・メルヴィルの『ピエール』における自由と個人主義

東京大学特別研究員　吉国浩哉

本発表は、『ピエール』のなかに、メルヴィルによる自由の理念の弁護、そして同時にその自由と個人主義との区別を読みとる試みである。この際に鍵となるのは、ピエールの「熱狂 Enthusiasm」という概念である。まずこの概念の思想史、特にカントによる考察を参照することにより、メルヴィルが用いるこの概念の両義性が検証されることになる。すなわち、ルーシーを捨て異母姉である（と自ら名乗る）イザベルと結婚するピエールは、地上的な幸福への関心を一切否定してそのように決断したのか、それとも自然の法則としての性的欲望に単純に従っただけなのか、どちらか決定できないということである。本発表は、この二項関係のうち、前者のような世界からの隔絶を「個人主義」とみなし、「自由」とは区別する。そして、この区別に基づいて、メルヴィルの考える「自由」を、むしろ「個人主義」と「自然」との間の宙づり状態に見いだそうとするものである。

第二室（本館2階D202教室）

司会　鳴門教育大学教授　前田一平

The Sun Also Rises における writing と respectability
語りのホモソーシャリティから照射して

千葉工業大学非常勤講師　田村恵理

まず *The Sun Also Rises* を homosocial な物語とし、Eve Kosofsky Sedgwick による homosocial の定義の2つの柱 misogyny と homophobia がその語りの特徴にあるとする。

次に、そこで語る行為が disrespectable なもの、語りえない emotion が respectable なものと位置づけられている事を示し、語られない Jake Barnes の emotion に注目する必要性を説く。

そして、Brett と Pedro Romero に対して向けられる Jake の emotion が、彼の語りの帯びる homosocial 性が原因で語られないものとして存在する事を示す。

こうした読みから、書くという語り行為を disrespectable なものと認めつつ、その行為により語りえないものへの emotion の昇華を目指す Hemingway の脱構築的な姿勢を示す。

司会　明治学院大学教授　笹田直人

Richard Wright, *Native Son* における“crystallized modes of expression”

成蹊大学大学院　大武佑

黒人作家リチャード・ライト（1908-1960）は、言語化するという行為に対する強い意識を持って *Native Son*（1940）を執筆した。その意識の表れである主人公の黒人青年ビガーは、白人に

よって心身ともに制限された状況に抵抗する手段として、言語を行使する力を得ようとした。形のない感情に、言葉という客観的な形を与え表現する行為は、人間として社会から認知されるために必要な条件だからだ。しかし、白人が独占する「高度に具現化された表現の様式」を手に入れようとするビガーの試みは、白人社会によって否定され、認知されることはない。

飛行機が空に煙で“GASOLINE”という文字を描く場面が示すのは、凝固（crystallize）しない液体であるガソリンと、黒人には与えられていない機会を象徴する飛行機である。それは、表現のための言語を必要としながらも言語の間接性によって対象から疎外される人間の宿命と、自らを表現する言語を持てずに社会との関係を築けない黒人という、アメリカ国家が内包する二重の疎外（exclusion）を意味している。

司会　広島女学院大学教授　森（もり）　あおい

Moving Mosaic
ネラ・ラーセンの *Quicksand*（1928）における即興的共同体の可能性

ウィスコンシン大学マディソン校大学院　佐久間（さくま）　由（ゆ）　梨（り）

本発表では、ハーレム・ルネサンスの作家ネラ・ラーセンの *Quicksand*（1928）を再読し、本小説が近代における新しい共同性の形式――即興の共同体――の想像可能性と結びついていることを示したい。自分探しを続ける主人公ヘルガの旅物語として簡単に要約できる *Quicksand* において、共同体とは帰属への常なる希求――“be/longing”（Bina Toledo Freiwald）――の対象として現れる。抑圧的な家庭領域に閉じ込められ病に伏す主人公を描く悲劇的結末はしかし、人種と性において二重に差別される黒人女性が共同体や家庭に帰属することの不可能性のみを暗示するわけではない。ラーセンはハーレムのキャバレーでジャズの即興演奏をたとえ束の間でも分かち合う観客達を描きながら、多様性、流動性、一時性に特徴づけられる即興的共同体の形式を模索しているからだ。モダニティ（黒人大移住後の都市近代化）を人種と性の交わる地点から物語化し、近代と共同性の問題に黒人女性の視点から応答するモダニスト小説として *Quicksand* を再解釈したい。

第 三 室（本館 3 階 D301 教室）

司会　北九州市立大学教授　漆原（うるしばら）　朗（さえ）　子（こ）

sprouting 構文と文主語制約

筑波大学大学院　岩崎（いわさき）　宏（ひろ）　之（ゆき）

Chung, Ladusaw, and McCloskey（1995）が sprouting と呼ぶ操作が適用されて派生される sprouting 構文においては、島の効果が生じるという事実が観察されている。本発表では、文主語制約を取り上げ、スルーシングが適用されていること自体にその非容認性を還元するのではなく（cf. Nakao 2009）、スルーシングが適用されているにもかかわらず、文主語制約の違反が緩和されない事例として、その非容認性を解釈すべきであることを論証する。さらに、本発表で提示する分析の含意として、本発表での分析を通じて得られた island repair の効果が見られな

い事例と、スルーシングの適用によって文主語制約の違反が緩和される事例とを直接結び付けることが可能となることを示し、このことは、文主語制約の本質を探る上で一つの大きな基盤となり得ることを示唆する。

心理動詞における項の共起制限

東北大学大学院　椙本顕士（すぎもとけんじ）

Reinhart（2002）は、語彙目録と統語の接触領域を可能にする Theta system（TS）を提案し、非対格自動詞と非能格自動詞の獲得の問題、また、使役動詞と心理動詞の統語的特性など広範囲にわたる現象に対して有意味な説明が可能になると論じる。しかし、TS では語彙目録から統語への写像の際、Cluster distinctness（CD）という条件を課すことで、Pesetsky（1995）の T/SM Restriction という記述的一般化が説明されているが、この説明には問題がある。本論では、この問題を解決するために、CD を LF 表示に適用される解釈原理として再定式化し、さらに、統語派生の中で有生の原因項が T と照合関係に入ることによって、intentionality 素性を付与されると提案する。この帰結として、本論の分析が CD を導入する根拠となった語彙的使役と分析的使役の対比を依然として説明でき、また、Pesetsky（1995）の HMC に基づく分析より妥当であると論じる。

Tough 構文に対する単文分析の可能性

中京大学准教授　中川直志（なかがわなおし）

本発表においては、（1）のような、いわゆる tough 構文の統語構造について考察する。

（1）John is easy to please.

従来、tough 構文における形容詞については、AP の主要部として不定詞節を補部に取るとする分析が主流であるが、tough 類形容詞の語彙範疇としての自立性の弱さや、その機能範疇的性質についても指摘されてきている。本発表ではこのような洞察を、tough 類形容詞が機能範疇の主要部を占めており、また、“to” は vP の主要部であるとする分析で定式化する。これにより、tough 構文は、不定詞節が多重に埋め込まれていない限り、従来仮定されてきた複文構造ではなく、単文構造を成していることが示唆される。具体的論拠として、tough 構文において “to” を残した動詞句削除ができないことや、不定詞節の主語位置が主節主語位置に対応できないこと等、tough 構文に特有の現象が上記の分析によって説明できる可能性を指摘する。

司会　神戸市外国語大学教授　山口治彦（やまぐちはるひこ）

話し手の解体と言語使用の三層モデル
文法と語用論の関係に関する日英語対照研究

【招待発表講師】筑波大学教授　廣瀬幸生（ひろせゆきお）

本発表では、まず、「話し手」を伝達の主体としての「公的自己」と、思考・意識の主体としての「私的自己」という二つの側面に解体し、日本語は私的自己中心の言語、英語は公的自己中心の言語と特徴づける。そして、これをさらに発展させ、文法と語用論の関係を扱う一般

理論として、次の「言語使用の三層モデル」を提示する。言語使用は、「状況把握」（私的自己による思いの形成）、「状況報告」（公的自己による思いの伝達）、「対人関係」（公的自己による聞き手への配慮）という三つの層からなり、言語のもつ「自己中心性」が英語のように公的自己にあるか、日本語のように私的自己にあるかによって、三つの層の組み合わせが異なる。文法と語用論の関係にかかわる日英語の差は、この三つの層の組み合わせの違いから生じることを具体的に論じる。

第四室（本館3階D302教室）

司会　慶應義塾大学教授　井上逸兵（いのうえいっぺい）

コミュニケーション能力育成と文学教材
その対立関係を越えて

東京大学大学院　久世恭子（くぜきょうこ）

本発表の目的は、新学習指導要領においてコミュニケーション能力育成重視の方針が一層明確に示された今、日本の英語教育のキーワードともいえる「コミュニケーション能力育成」と文学教材の関係を再考し、そのような方針の中で文学の果たす役割を探ることである。

日本の英語教育がより伝統的な教授法からコミュニケーション重視の教授法にシフトしてきた過程で、文学とコミュニケーションはしばしば対立する概念としてとらえられてきた。このことに、1980年前後に英米で文学教材が再評価された際にCommunicative Language Teachingが一つの原動力となったという事実を対比させ、改めて両者の関係とそれぞれの意味を論じる。その上で、コミュニケーション能力育成のために文学教材はどのような貢献ができるのか、具体的な活用例とそれに対する学習者の反応をいくつか紹介しながら議論したいと考えている。

英語上級者に多読をどう指導するか
「英語を読むのが楽しい」段階から「本を読むのが楽しい、たまたま英語の本だけれど」という段階を目指して

慶應義塾大学専任講師　深谷素子（ふかやもとこ）

平易な英語の本を大量に読む多読（extensive reading）が、英語に苦手意識を持つ学習者に対して、情意フィルターを下げ学習意欲を向上させるといった心理的効果を持ち、その結果英語力向上にも寄与し得ることが、すでに内外の先行研究によって明らかとなっている。このため、日本でも英語初級者向けに多読が導入される場合が多いが、英語上級者向けの多読授業にはどのような展開が考えられるだろうか。基礎的な文法や語彙がある程度備わった学習者なら、たとえgraded readersの下のレベルから読み始めても、早い段階でそれを卒業し、authentic materialを母語での読書の延長線上で読めるようになることが充分想定される。そこで本発表では、「英文を読むのに苦痛を感じない」段階から、「この本を読むのが楽しい、たまたま英語で書かれているけれど」という「読書のための読書」の段階を目指し、教師が積極的に助言、足場かけ（scaffolding）を行った上級者向け多読授業の成果について報告する。そこから多読授業全般への示唆も得られるものと考えている。

司会　東京大学教授　斎藤兆史（さいとう よしふみ）

「モダニスト・フィクション」を教える

兵庫県立大学准教授　寺西雅之（てらにし まさゆき）

本発表では、モダニズム文学を扱った授業を取り上げ、その考察・分析を通じて文学教育及び文学作品を用いた英語教育のあり方とその課題に関して論じる。多読用テキストとして脚光を浴びている文学作品も存在する一方、昨今の文学教材に対する逆風の中、モダニズムの難解で文学性の強い作品は、少なくとも英語教材としては注目されていないようである。しかしながら、モダニズムの文学は、作家の意図やテーマが言語や文体に強く反映されている点で、英語教育に果たすべき役割は少なくない。さらにそのテクストから、“reality” の見方が変わりつつあった当時の社会背景が読み取れるなど、文学教育の観点からも格好の教材となり得る。本発表では、モダニズムの小説と短編に焦点を当て、そのテクストに社会的コンテクストが色濃く反映されている事実を踏まえ、英語および文学教育においてモダニズム作品を如何に活用し、教材化していくべきか考察する。

母語に活かす英語ライティング指導の試み
マルチコンピテンス育成をめざして

【招待発表講師】千葉大学教授　大井恭子（おおい きょうこ）

本発表は、Vivian Cook（2001）の唱えるマルチコンピテンス理論の日本の英語教育現場での検証を目指すものである。Cook は、外国語を学ぶことにより母語の力もより豊かになり、学習者の中に母語と目標言語があいまったマルチコンピテンスが形成されると説く。本研究では、英文ライティングを学ぶことにより、日本人の学習者が、英文が本質的に内包している「論理的文章構成法」を体得し、英文ライティングで培った論理的思考力や表現力がマルチコンピテンスとして学習者の能力の一部となり、それが必要に応じて母語、すなわち日本語での作文やプレゼンテーション力へも転移が可能であるという仮説の実証を試みるものである。中学生や大学生を対象にした英文ライティングの授業から得られたデータを分析し、学習者の中に育成されたマルチコンピテンス萌芽の特定を試みる。